

# 書誌とジェンダー

泉谷 瞬

本稿では、自分自身の問題意識から話を始めてみたい。学生の卒業論文に取り組んだ時期から私は「ジェンダー」という概念に興味を持ち、文学作品の分析にジェンダー論の知見を用するという手法を、不十分ながらこれまで進めてきた。その中でも分析対象として書いたものは、「女性作家」の作品がほとんどである。

そうした自身の活動に一切の疑問を持たなかったわけではない。ジェンダーとは、社会的に構築された性別・性差という意味付けをめぐる概念であるため、根本の問題意識において「男／女」といったグループを設定することは、本来ならば矛盾する行いであるとも言える。つまり、「男／女」という意味付けを問い直すための研究であるにもかかわらず、その分析対象に「女性であること（あるいは、「女性」と社会的に見なされること）」を予見的に考慮する態度は、何か同じ道をぐるぐると回るもの

のように感じてしまうのだ。これは「女性作家」や「男性作家」という区分を設け、たとえそれが肯定的なものであれ、何らかの評価や価値判断を加える過程が、既にジェンダーを構成する要因の一つになり得ることへの危惧と言ってもよいだろう（ここに画一的な男女の二分法では収まらない概念——「クイア」を挟んでも、状況はあまり変わらないと推測する。たとえば「クイアな作家／作品」という評価の流通が成立することが、「クイア」であるとはどういうことなのか、あらかじめ綺麗に定義付けられている事態を意味してしまいうように）。

もちろん、「女性作家」であるから、といった単純な理由によつて分析対象を選定したことは一度もない。文学研究とジェンダー論という取り合わせが、イコールとなつて女性作家研究に限定されるルールなども存在しないはずだ。作品の魅力をいかにして引き出すか、そしてそのことがジェンダーの問題とど

のように絡まり合っているか、この二点を最優先の関心として設定してきたつもりである。その結果、「女性作家」の作品がたまたま自分の関心として多く飛び込んできた、というだけの話なのかもしれない。

しかし、そうであったとしてもこの問題は簡単に済む話ではないし、済ませてはならない。何故ならばここには、社会的な実践の次元、そして表象分析という両面において、「男／女」という性差が常に意味付けられていくことよって出現する非対称性の困難が、潜んでいるからである。この非対称性を持った構造について、どのように向き合うべきか。すなわち、この構造を解明すること、解消することという二つの作業を並行する点にこそ、ジェンダー論を基盤とする文学研究を続ける中で、私自身が陥った疑問の核心があるのではないかと思う。

「男／女」という性差がいかにして構築され、さらにはマクロ・ミクロの視点を問わず、どのような形で個々の人々の生活へ介入し、微妙な差異を含みながら反復されているのか——こうした構造を、文学作品を基点に解きほぐす有効性については疑うまでもないだろう。作家の来歴から思想までを射程に入れた分析にしろ、メディアの歴史の変遷や精緻な同時代状況の注釈と作品を対比するアプローチにしろ、性の構造が生み出した文学の制度における偏差（女流）という評価軸がその代表的なものと言える）を批判的に捉え返す視座にしろ、構造の「解明」について、文学研究が貢献できる余地は十分に残されている。

それでは、非対称的なジェンダー構造がもたらす問題の「解消」という点について、文学研究はどのような立場をとり得るのだろうか。先程から何度も挙げている「非対称性」という言葉であるが、優劣を伴った（と意味付けされる）性の二項対立としてジェンダーの構造を捉えるならば、その「解消」とは必然的に政治性を帯びたものとなる。一定の中立性・客観性を要求される学問の世界にあって、ジェンダー論を核とする文学研究が直面するこうした疑問は、まさしくフェミニズム批評から継続する課題であるに違いない。

以上のような私の素朴な疑問に対しては、様々な応答が可能であると思われる。たとえば、ジェンダー論に限らず、政治性を完全に離れた研究のプロセスなどということが本当はあり得ないのであって、更新されるべきは、その力学に無自覚な研究の体制であると。すると、構造の「解明」を成果として提出する行為が、そのまま「解消」への道筋につながる展開が最も理想的な形と呼べるだろうし、現在の人文科学研究に関わる者としては、そうした構想のもとに研究を見据える倫理的な姿勢を携えることが当然となってくるのだろう。

だが、それにしてもその具体的な道筋が見えづらい。自分が発表してきた数少ない論文を改めて振り返ってみても、これら「解明」と「解消」のどちらかにかろうじて辿り着けたものはあるだろうか。ましてや、その二つを架橋する仕事となると言語化は途端に難しくなる。

浦西和彦氏の研究は、私のこうした個人的かつ政治的な疑問に一つの示唆を与えてくれるものであった。浦西氏は、個別の「女性作家」を対象とした書誌についても、緻密な業績を複数作成している。その初期の成果と見られる大田洋子の著作目録をまとめるにあたって、浦西氏が次のように断定しているのは興味深い。

たとえどのような性格的欠点があったとしても、大田洋子が原爆に憎悪をかけた努力、原爆被害のすさまじさを、精一杯の力で、真实性において描きだした、その作品を抹殺されてはならぬ。作品は作者の手を離れて、独り立ちするもので、比類のない芸術的証言となっている大田洋子の原爆文学は、それを書いた作者などのちっぽけな性格など、何の痛痒をもあたえない。原水爆禁止運動の式典がいくら盛大に大規模になされても、大田洋子の原爆文学が、人類の遺産として、将来にわたって継承されないようでは意味がないであろう。

（大田洋子著作目録、『関西大学文学論集』第二七巻第一号、一九七七年九月、七一頁）

ここで宣言されるのは、文学作品そのものに対する強い信頼感である。もしくは、業界にはびこる作家の「悪評」を切斷し、作品を遺すことへの使命感とも言い換えられるだろうか。確か

に書誌を整理する作業とは、ジェンダーによる予断を可能な限り排除できる方法の一つと考えられる。「作品の理解や解釈や評価にとつて、その作品がいつどこに発表されたものかということが、いかなる作家によつて執筆されたかということと共に大事なことである」という浦西氏の言葉は、書誌の精密性と文学研究の質が決して分離できないものであることを如実に語っている。

そのように注目すると、浦西氏が力を尽くして取り組んでいた田辺聖子の文学についても、その評価の中身は、書誌的な事実を積み重ねて構成されていることに気付く。二〇一五年二月五日に行われた大阪樟蔭女子大学国文学科公開講演会にて、浦西氏は次のように述べている。

時代や社会は常に変化していきます。田辺さんの小説はその進んでいく時代や社会を一步先に描きます。例えば、優雅な一人暮らしを満喫している歌子さんを主人公にした「姥ざかり」シリーズがあります。これが書かれたのは非常に早い時期ですね。昭和五十四年に書かれています。七十歳とか八十歳の元気なお年寄りには珍しくありません。田辺さんは老人問題が社会問題となる以前に、昭和五十四年に小説の主人公を七十八歳の老女に設定して書いています。自分の健康も、それから自分のやりたいことも、自分の財産の管理も、自分の息子たちに任せておけな

い。自分のやりたいことをやり、自由に生きたい。それでマンションに一人で住んでいる元気なお年寄りです。老いでゆく理想の女性の生き方を昭和五十四年に発想しているのです。

(「田辺聖子の文学万華鏡」、『樟蔭国文学』第五十三号、二〇一七年三月、六二頁。傍点は論者による)

作家の個性や才能を評価する根拠として何度も強調されるのが、「昭和五十四年」という執筆時期である。むしろこれは、作品に遡っていく姿勢と言えらる。浦西氏の論考には、作者の性別を根拠とした安直な分析はほぼ存在しないように見える。そこにあるのは、書誌的な事実から導き出されること、作品から導き出されることであり、あくまでもその結果として作家の輪郭が浮かび上がってくるのである。

だが、ジェンダー論の観点からすると不安は残るだろう。性別による事前的な判断を抜きにした書誌学的方法による文学研究は、「非対称性」の困難をどのように解決するのか。ジェンダーの構造が不可視化されてきた歴史の中で、そもそも評価される機会の少ない立場に置かれた「女性作家」の作品に対しては、やはりそこにあてがわれた非対称性を含めて検討の対象とすべきではないのか。本稿で先に述べた問題意識と関連付けるならば、書誌学的方法による文学研究は、ジェンダー構造の「解明」と「解消」をいかにして可能にするのだろうか。

実を言えば浦西氏の仕事は、私のこうした疑問を既に先回りしている。田辺聖子の膨大な著作群を整備した書の「はしがき」で、浦西氏はこのように述べていたからだ。

本書を作成してみてもつくづくと思うことは、女性雑誌・婦人雑誌・「問題小説」などの中間読物雑誌・少年少女雑誌などを調査する場合、それらを所蔵している図書館が貧弱であるということである。

(『田辺聖子書誌』和泉書院、一九九五年一月、二頁)

また後には、「文芸時評が定期的にある純文学と違い、直木賞系の読み物は高度成長期に書き手を育てた一方、解説者や評論家を育ててこなかった」として、「純文学／大衆文学」といった階級的とも呼べるカテゴリーによる「近代文学研究の偏り」を批判している点も見逃せない。

ここから分かることは、浦西氏の研究には、ジェンダーをはじめとした様々な構造・制度によって生み出された非対称性への鋭敏な眼差しが根底に備わっているということだ。つまり、対象が何であるかを把握せず、ひたすらに記録を残し、事実を列挙するだけという無目的な態度ではない。私なりに都合良く解釈するならば、浦西氏が遺した数々の業績は、非対称的な境遇に置かれた「女性作家」の位置を引き戻すためのエンパワーメントとしても機能するのである。

これほどまでに明快な「解明」と「解消」の両立を示してくれた先達の方法を前にして、できることは何だろうか。作品に密着しつつも、同時にその作品がどのような位置に立たされているのかを俯瞰する。極めて当然の認識でありながら、しかし実現することが難しい文学研究の原則であるこの課題は、相変わらず我が身に余るものではあるが、それでも具体的な道筋は見えてきた。

浦西氏の仕事が放った思考と方法は、おそらくその意図を超えた場所にまで届き、後続である私たちへ確実に影響を及ぼしている。だから、最後に引用する次の文章にしても、ただ「書誌」のことに限った話として受け取るべきではない。これは、ある優れた達成に対して、悩みながらも研究の枝をねばり強く接いでいくという種類の話なのである。

ただ機械的に文献を羅列し並べるだけの書誌は終わったのである。ものを調べる基礎ルーツとしての書誌から、書誌そのものが文学研究そのものの成果の到達点を示すものであらねばならない。書誌作りで大事なことは、常にそこになにか新しい工夫、独創性というものが、きらめいていることである。<sup>(3)</sup>

#### 注

(1) 浦西和彦「書誌について」『著述と書誌 第二巻 現代文学研究の基底』和泉書院、二〇〇九年二月、五一―七頁。

(2) 「田辺聖子さん 純文学の壁崩した先駆者」『朝日新聞』二〇〇六年七月二十九日大阪版夕刊。

(3) 浦西和彦「書誌について」前掲、五二―五頁。